# 神様と師匠

# 龍の花嫁　4

**EntsCat**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18379895**

R-18, モ腐サイコ100, モブ霊, もぶ神様×霊幻, もぶおばさん×霊幻, 本番無し, 女装(白無垢)

相談所vs神様４話目です。性癖全開ですみません。師匠がもぶおばさんにイタズラされたり辱められます。お好きな方はお楽しみください。

# 龍の花嫁　4

『すみません、どうも相談所に行こうとすると腹の調子がおかしくなって』
芹沢からの電話に、ピクリと霊幻は反応する。
「それ、お前神様に祟られてないか？実は……」
霊幻がかいつまんで説明すると、あー、と電話の向こうで芹沢が分かったような声を出した。
『何か変な感じはしてたんですよ。何か悪い感じはしないオーラみたいなのがまとわりついているっていうか……試しにはらってみますね』
バシュウ、と電話の向こうで音がする。
『……腹痛、おさまりました。どうも祟りにあってたみたいです。大変なことになってるじゃないですか……念のため薄くバリア張りながら相談所に向かいますね』
「それなんだが、芹沢、お前に文献調査をお願いしたい」
昼間は霊幻も茂夫も仕事や学校でやしろに向かえない。夜になると儀式で文献どころではない。
昼間動ける芹沢に、そのあたりの調査をお願いしたい、と霊幻は言う。
『……分かりました。俺にできることなら……』
「たぶん古文の授業みたいになると思うから、その辺りに詳しいエクボに付いてもらえるかきいとくわ」
『はい。じゃ、向かいますね』
電話を切って、到着した予約客に笑顔を向ける霊幻。
あと５日でもしかしたら何もかも終わりかぁ、と頭の隅で、うっすら考えていた。
まぁ、死に別れは後腐れなくていいかもなぁ、と茂夫たちに知られたら一瞬で怒り100%超えそうなことも、同時に。

※※※※※

「こんにちは、霊とか相談所のものです」
古い日本家屋のチャイムを押して、芹沢は出てきた黒い着物の妙齢の女性に挨拶をする。
「花嫁の付き添いの方ですね。今回はどう言ったご用事で？結納返しですか？」
霊幻をごく自然に生け贄扱いする女性にむっとしながら、文献を読みに来た、と芹沢は伝える。
「オイ芹沢、俺様にもバリア張ってくれ」
遅れてエクボも合流した。
女性は日本家屋の奥の書斎に芹沢を案内する。
「なにぶん私どももほとんど読んだことはありませんので……ご案内はできませんが。どうぞごゆっくり」
部屋一面の古書に芹沢は目眩がする。
とりあえず一冊手に取ってみると、「徒然草」と表紙に書かれていたので、無言で戻した。
「あの女、行ったか」
「うん。もう話してても怪しまれないよ、エクボ」
「あの女、儀式に協力的すぎるな……もしかしたら、儀式には祟りだけじゃなくて、ご利益もあるのかもしれねぇな」
「ごりやく？」
「子孫繁栄とか、五穀豊穣とか……とにかく、欲に目がくらんだ顔してやがった。気を付けろよ、こちらを妨害してくるかもしれねぇ」
「普通の女の人に負けるほど弱くはないよ。ケガはさせないようにはするから遅れはとるかもしれないけど」
「油断するなよ。何しろあっちには『神の加護』がある」
「……わかった」
それから芹沢は無言で本棚の左上から順に本を取り出しては、題名や中身を確認して戻す作業に入る。
３時間ほどしたころ。
「これ……『調味暦』って書いてある」
「お？読んでみろよ」
「延暦2年……？」

「平安時代の元号だな。あれだ、平成とか昭和とかと同じ」
「大規模な洪水があった、って書いてあるのかな」
「まぁおおむねそんな感じだな」
「あとは豊作だったとか、飢饉があったとか……あ、当時の地図もつたない手書きで描いてあるね」
「おい見せてみろ」
今とは似ても似つかない地図。
「昔は大きな川が調味市を通ってたみたいだな。荒潮（あらじお）川……」
「そんな川があったんだね」
「荒潮……名前からして何度も氾濫した川だ。治水工事の果てに、埋め立てられたんだろうな。それで、その川をまつってたこの神社が潰れたんだろうよ。おそらく隣の公園まで含んでた、相当大きな神社だったはずだ。まつるのが守り手の一族しか残ってなくてもこれだけの神気を残すんだからなァ」
「あ……エクボ、ここ」
「『お告げを受けた村長の長女が川の神を鎮めるため、川に身を沈める……婚約者の男、後を追いはかなくなる……それより村は栄え、川は穏やかに……』なるほどなぁ、生け贄のはじまりか。話としては珍しくないがな」
「えっ」
「日本じゃ最近まで生け贄ってのは珍しくないんだぜ。江戸時代に作られた橋の根元に人柱が埋まってるなんてザラだ」
「そうなんだ……怖いね」
「ただ、あくまで昔話だ。この時代に生け贄なんてナンセンスだぜ。オイ、他に儀式について何か……」
プルルル、と芹沢の携帯に電話がかかってくる。
『あーもしもし芹沢？お前そろそろ学校の時間だろ。今日はそれぐらいにしとけ』
「でも霊幻さん、やっと神様の名前が荒潮川だって分かったぐらいで……」
『充分じゃねーか。とにかくもう学校行け。神様の思う壷みたいな生活になんじゃねぇ』

「……っ、分かりました」
芹沢は本を閉じて本棚に戻す。

きびすを返した芹沢を、じっと見ていた目があった。

※※※※※

「本日は花嫁修行と、衣装合わせでございます」
「へぇへぇ」
霊幻と茂夫、そしてエクボはもはや慣れた老婆の迎えにおざなりに応える。
が、後ろから５人ほど黒い留袖の３、４０代の女性が出てきて、３人はぎょっとした。
「ささ、花嫁様、こちらへ」
ぐいぐいと霊幻だけが別室に連れ込まれるが、相手が女性だけに霊幻も茂夫も強く抵抗できない。
「これより花嫁の身支度を行いますので、殿方は入室をご遠慮ください」
霊幻の性別を無視した言い草に、茂夫はむっとする。そっとエクボに耳打ちして、ついて行って危なかったら助けてもらうことにした。
「ったく、朝から悪霊づかいが荒いぜぇ」

※

「あ、あのお嬢さんがた、その、」
「大丈夫、私たちに身を任せて」
霊幻はしゅるりとネクタイを外され、あれよあれよと言う間に裸にされる。
女性達の前で下着まで剥かれ、慌てて手で隠した。
「大丈夫、私たちはみな既婚者です。そのようなものは見慣れておりますゆえ」
「あら、ダンナのよりピンクで可愛らしかったわ？」

かっ、と霊幻の顔が羞恥で赤くなる。
「そんなことを言っては可哀想よ」
「美しい身体と言うことの何が悪くって？」
「あらまぁ」
「くすくす」
「くすくす」
恥ずかしさに身を縮めた霊幻を女性達は風呂に連れて行く。
客用の大きなヒノキ風呂に、甘い香が立ち込めていた。
「さぁ、花嫁様」
「え……」
女性達は風呂にまで入ってきて、その細い手で霊幻の身体を直接触って洗い始めた。また、別の女性が体毛を剃り始める。
「やめ、やめてください！」
「儀式に必要なことですので」
「勝手に毛まで……！」
「こちらもキレイにしておかないとね」
「え」
女性はイチジク浣腸を手に霊幻の前にひざまずいた。
「──！」

トイレに行くことも許されず、ぐったりした霊幻の身体を好きに洗った女性達は、次に甘ったるい匂いのさらっとしたローションを霊幻にぬりこみはじめる。
「初夜が辛くないよう、スポンジを入れておきますね」
「……は？」
女性のひとりが海藻でできたスポンジを水に浸し、それを霊幻の後口に押し込んだ。
「ぐ、ぅ……ッ！」
「この海藻は水を吸うと10分ほどでゴルフボール程まで膨らみます。処女の花嫁様にはつらいかもしれませんが、痛みはないはずです」
「んぐ……はぁ、うっ……」
触れたことのない場所の激しい違和感に霊幻が身をよじってうめ

く。
それを見て可哀想に思ったのか、女性の１人が霊幻の性器に手を伸ばした。
「少し、気を逸らして……」
「！やめろ、そこに触ったらさすがに強姦罪で訴えるぞ！！」
びくりと女性が手を引っ込める。
「……辛さを和らげてあげようとしただけですのよ」
「……っは、結構、です……」
膨らんだスポンジを取り出した後も、まだ何か中に入っているような違和感を霊幻は感じていた。
風呂から出ると、髪も女性たちに乾かされ、また甘い匂いのする乳液をつけられる。
（身を捧げる準備、って感じだな……）
真っ白な肌襦袢を着せられた霊幻は、数十着の白無垢が並べられた部屋に連れて行かれた。
そこからは着せ替え人形である。
「こちらの方が似合うのではないこと？」
「花嫁様は肌が白いから、少し朱の入ってるものの方が似合ってよ」
「あら、白一色は譲れないわ」
そして、衣装が決まって。
お披露目として、しずしずと茂夫が待つ応接室に霊幻は向かわさせられた。
「わ……」
紅をさされて、生来の器用さからか白無垢を着こなし綿帽子を被った霊幻に、モブはごくりと生唾をのむ。
サイズ直しもしたのか、袖から覗く手は華奢に小さく見え、襟口のうなじから鎖骨にかけては白く目に眩しい。
何より、その気怠げに紅潮した表情が醸し出す、色気。
花嫁衣装の破壊力に茂夫は目眩がした。
「ししょう、きれいです……」
「やめろよ、笑ってくれよ」
似合ってない、と恥じらう霊幻に、さらに茂夫は目眩が増したのは

言うまでもない。
和服で恥じらう師匠は最強だと茂夫は思った。

介添えの老婆に手を引かれ、着物の裾を女性達に持ち上げられながら、霊幻は古いやしろに入っていく。
花嫁衣装で布団に横たわるのは「食べて」と待つようで、少し霊幻は恥ずかしくなった。
が、それを言い出す間もなく、霊幻の意識は無くなった。

※※※※※※

いつもの和室に大人のモブの姿をした神が座っている。
「やあ、霊幻。今日は一段と綺麗だね」
「よう、変態神様。昨日ぶりだな」
「……よくもまぁ、神にそのような口がきけるものだ」
「なにぶん口は商売道具でね」
「……今日はずいぶん保つね」
「あ？モブと勘違いしない、ってか？多分これが関係あるんじゃないかな……『荒潮川』様？」
龍神の目が一際強く光った。
なんだか……あたま、が……。
「『霊幻』ししょう、こっちに来てください」
なんだよ、モブ……今さらなんの用だ……？
「いい匂いだ。たまらない。私と契りましょう」
からだに力が入らない。俺はモブの胸に抱きかかえられてしまった。
そのまま口付けられそうになって、慌ててそっと手でモブの口を押さえた。
「ダメだ。俺たちは別れたんだから、こんなこと、ズルズル続けちゃいけない……！」
「『霊幻』……もはや、既成事実を作ってしまおう？」
身体がしびれて抵抗できない。
俺はモブに押し倒されて、合わせから手を入れられる。

「あっ、ぁ……」
「いい声だ。私の手で鳴いておくれ」
あれ、遠くから、モブの声……？
目の前のモブはそれに舌打ちし、すっ、と目の前の裾から太ももに触れて、そのまま……っ、
「駄目だ！！」
なんとか手を払い除ける。

『ししょう！』

ばち、と目が開いた。

※※※※※

霊幻が目覚めると、真っ赤な顔をした茂夫がふーふー言いながら正座していた。
「アンタ……っ、神様と、ナニしてたんですか……！？あんな声出して……！」
霊幻が見ると、花嫁衣装は乱暴に乱されていて、何をしていたかは一目瞭然だった。
「落ち着けよシゲオ。少なくとも霊幻のヤロウの魂の方の貞操は無事だ。もし契ってたら、命はもう無いだろうさ」
「え」
師匠、僕を拒んだんですか、とそれはそれでショックを受けて茂夫がつぶやく。
いつものように霊幻がエクボに目配せして、席を外してもらう。
「本物のお前なら、拒みはしないさ」
霊幻の口付けを受けると、ふわりと麝香の淫靡な匂いが茂夫を刺激する。
「師匠……っ」
やしろには誰もいない。
おあつらえむきに、霊幻の後ろの準備も終わっていた。
「おいで、モブ」

霊幻が茂夫の耳をくすぐると、がばっと茂夫は霊幻に覆いかぶさってきた。
肌をまさぐり、秘部に触れようとした時。
バチィっ、と茂夫の手がはじかれた。
なんらかの守護が、神によって霊幻にかけられていたのだ。
「……くそっ！」
茂夫は目の前が赤く染まって見えてくる。怒りと嫉妬だった。
「……何かあったんだな、モブ？」
「師匠のからだに、神様のバリアが張られていました。破壊しないと触れない」
「……そっか。じゃあ、今日はこっちで」
「え？」
霊幻は起き上がり、ゴソゴソと茂夫の股間をくつろげさせて性器を取り出す。
「ぅん……」
紅を塗られた唇が、性器を飲み込んでいく。
「ししょう、ちょっと……！」
限界にきていた茂夫はひとたまりもなく口の中で達したが、
「いっひゃいでたな……？」
赤い唇の中の白濁を見せつけられ、
白無垢の師匠の喉がこくこくと動くのを見せられ、
確実に性癖を増やされていた。

※※※※※

茂夫とエクボの帰り道。
「師匠、華奢だから和服似合ってたな……」
「惚れた欲目、入ってるんじゃねぇか？」
呆れた声でエクボが返す。
「それにしても、僕を拒むなんて……さっきの師匠からは考えられない。どういうことだろう？」
「……考えられんのは、神様が大人のシゲオの姿で出てきてる、ってことだろうなぁ」

「大人？それが何か関係あるの？」
「言いにくいがよ……中学生ぐらいから付き合ってるカップルって、大人になったら色んな選択肢とか異性に出会って、別れちまうことが多いんだよ。だから霊幻も、シゲオが大人になったら、別れを切り出すと思ってて、それで別れたつもりでいる……とか……って俺様にキレるんじゃねーよシゲオ！！」
ゆらゆらと髪がざわめく茂夫にエクボがまぁまぁとなだめる。
「……あの人は、僕の気持ちをそんなモノだと思ってるのか……」
「そーだよな！？幼なじみとか初恋で結婚してるやつもいるもんな！？！？」
はぁ、とため息をついて茂夫は髪をおさめる。
「分かってないよ、師匠。どうして僕が同じだと思うんだろう？」
「そりゃあ……一般的にだな……」

「僕が見ている世界は、一般的じゃないこと、知ってるはずなのにね」

続